

ハインリッヒ・シュッツ合唱団 DDR演奏旅行報告

淡野弓子



撮影 風間久和

一九八五年十月六日より十月十五日まで、東京ハインリッヒ・シュッツ合唱団は、DDR文化省及び芸術公団の招きにより、ハインリッヒ・シュッツ音楽祭をはじめとする各地のコンサートで、合唱やオルガン独奏などによるプログラムを演奏、これは我が国のみならずドイツ民主共和国にとっても意義のある出来事として注目された。この旅の二週間に起ったさまざまなことは、あまりにも多岐にわたり、また、時間的にも歴史が層をなして押し寄せたような複雑な内容を持つもので、ここにその全てを書き記すことはとうてい不可能であるとはいえ、この報告の機会と紙面とお与え下さった日本DDR文化協会に感謝しつつ、思いつくままにその一端をお伝えしたい。

コンサートの初日は十月六日、その一日前五日の正午すぎに私たちは西ベルリンのテイ

ーゲル空港に到着。実はこの間一週間を西ドイツで演奏してきたメンバー（四日、すでに六名が帰国）と、DDR演奏旅行から参加するメンバーが合流、芸術公団の方々の出迎えを受け、三名のエスコート（トウルネー・ライターのガレッツキ氏、通訳のハンスさん、ドーリト嬢）と共に、二台のバスに分乗、フランクフルト・アン・デア・オーダー市に向かった。私達は演奏メンバー男性十名、女性二十五名、メンバーの家族二名のほかに南海放送テレビ取材陣三名、写真、録音を受け持つて下さった大阪H・シュッツ友の会の帯包隆一氏、それに東京外事の添乗員牛久保さんを交えた総勢四十一名であった。

ホテル・シュタット・フランクフルトに着、荷物を置くすぐ翌日の演奏会場を見に行った。ホールの名は、コンツェルトハレ「カール・フライリップ・エマヌエル・バッハ」。建物は教会風、内部はコンサートホール、すぐ

わきに廃虚と化した教会堂、ホールの後方はオーダー河、川向こうはポーランド。どのような聴衆がどのような音楽を待っているのか、かにも見当がつかない。しかし、何か私たちの日常感覚とは違うピリピリした非常事態的空氣が漂っている。そのホールに曲る道角には、それでもガラス張りの広告ケースのようなものがあり、その中に大きなペーター・シュライアーの笑顔と共に、我らシュッツ合唱団の写真が飾られてあった。「あー、やっばり明日は歌うんだな」というのが正直な思いであった。というのは、ここに来るまでの三年間（契約書を交わしたのは、一九八二年十月二十八日）、何度か芸術公団からジャパン・アーツを通してテレックスを受け取っていたのだが、そのたびに演奏都市と日時とプログラムが少しずつ変更され、それが出発の日まで続いていたからである。

ホテルに戻ると、スケジュールの打ち合わせ。私は「どこで何を歌うのか」をまず確認、次に「毎日、演奏会場にはできるだけ早く入れるように、また練習時間は可能な限り長く——」と頼んだ。また、日当一人五十マルクは四十マルクを食費として公団に委託、その代わり毎日必ず皆の食事が同時に用意される

ようお願いした。これはこのようにしておいて本当に助かった。

十月六日。コンツェルトハレ「C・P・E・バッハ」は、以前は教会付き修道院であったものを市が買いあげ、コンサートホールに改装したものだ。よく見れば、教会のときには祭壇であった箇所が、今は座席後方となり、後部に位置していたであろうオルガンが前方にそびえる形となっている。しかしアクセステイクは石造りの壁からくる透明な響きを留めていた。

さてこの日は日曜日、午前中私たちは礼拝を行っている教会を探し歩いた。公園の角の公民館の会議室のようなところがそれであった。熱心な信者が八十名前後、驚いたことに、その雰囲気は日本のキリスト教会の日曜礼拝のそれといささかも変わるものではなかった。牧師の説教は「神は、私たちに季節を与え、収穫を下さる。神は世々我々を集わしめ、今も集わしめている。見よ、今日は遠方の国から来たらしい人々も集っている。御業は偉大なるかな」というもので、私たちも何とも言い知れぬ感慨におそわれた。思えば何の変哲もない、一年に五十数回迎える日曜日の一日、この国境沿いの町の、もとはキリスト教を国

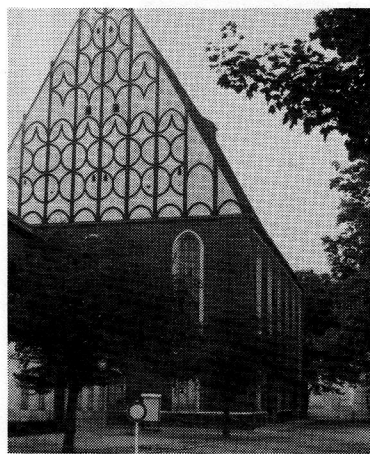
教としていた人々の、今はこれといった国家の援助もなく、教会堂もなく、大きなオルガンも聖歌隊もなく、ただ天井があり、四方を外界からさえぎる壁の中で、質素に礼拝を守る人々の群れの中に、私たちは一体どのような計画のもとに、なぜ迎え入れられたのだろうか。

第一目のプログラムは、シュッツのモテット（宗教合唱曲集一六四八年より）とブックステューデのオルガン曲を組み合わせたもの。練習のときに私は言った。「私たちは今、おおよそ想像のつかないことをしようとしています。いや、どうしてもしなければならぬところへ追い込まれているのです。どんな人々が、何を期待してどれくらい集まるのか見当もつきません。そう、ああでもない、こうでもない不安な材料を並べるのはやめにして、とにかく音楽に集中しよう」

開幕。満員の聴衆！オルガンを弾く武久源造も、チェロ専攻の学生でオルガンのアシスタントをも務める井出丈夫も相当に緊張している。オルガンのストップは複雑なコンビネーション装置で制御されており、各々のスイッチ類の機能はすべて色分けされている。武久源造は盲目、井出丈夫はドイツ語がまだ

よく分からないとあって、私もオルガン席に上がり演奏を見守ることにした。終ると下において合唱の指揮、また上へを繰り返すこととなった。ともかくも演奏は始まった。

第一曲目のモテット《神の救いのみ恵みが現われた》(Es ist erschienen die heilsame Gnade Gottes)、私たちの歌う言葉がそのまま直接に聴衆の耳に届いていくさまはすばらしい。改めてシュッツの精妙なドイツ語の扱い方に驚く。私たちの歌ったドイツ語の発音は、各地で「良く分かる」といわれたが、それはシュッツの書いたとおり歌ったからだと思ふ。合唱団も、一声歌い出せばあとは音楽の魔力によってエネルギーが増幅され、思っていたより楽に演奏できた。一曲終ると思いがけないものに接した驚きの表情と熱心な拍手。手



コンツェルトハレC・P・E・バッハ

の鳴る音一つ一つが私たちの心を快く解きほぐしていく。オルガン・ソロに対する称賛も大きなものであった。演奏前の不安が、今まで味わったことのないものであっただけに、このように暖かくまた深い心をもった聴衆が待っていてくれたことは、うれしくまた感謝であった。

十月七日、八日、コンサートはお休み。九日のコンサートに備え、ヴァイスヴァッサーというところへ行く。クリスタルガラス工芸の町。自然動物園の中のレストランで食事。

思い出は、ひなびた田舎町、秋の日射し、ときどきぬつと現われる羊、牛、豚、そして水際のおしどり。しかし、この二日間の休日はこれらのんびりとした雰囲気を楽しむどころではなかった。さまざまな興奮に包まれた我々合唱団の声をなんとか一つのハーモニーにしなければならなかったからである。ホテルの狭い部屋を一室借り切って練習に明け暮れた二日間であった。

十月九日、ホイヤースヴェルグ。前々日のホールとはうって変わって、そこは博物館内の一隅を占める小さなホール。まず舞台の中心線が少しずれており、古ぼけたグラランドピアノが奇妙な向きに置かれてあった。よく探

し回れば、舞台の裏側にはチェンバロが横にねかせてあったが、使っている形跡はない。

「ああシューベルトやブラームスも用意してくれば良かった」と思ったがもう遅い。しかしともかく、今日予定されているシュッツのモテット二十四曲、というプログラムはふさわしくないと判断し、急拠プログラムを変更。シュッツのモテット数曲とムジカリッシェ・エクセクヴィエン（音楽による葬送）を歌うことにした。

せまい客席ながら暖かい雰囲気溢れ、ここに顔の人が多かった。エクセクヴィエンでは、最後に天使達の合唱が舞台とは反対側に立って応答する型をとるのだが、この狭い部屋では客席の側面を左右から二つのコーラスが囲み、後方には鈴木仁氏に立っていただくというスタイルにするほかなかった。要するに、前後左右から聴衆をぐるりと包みこんだような配置となったわけだが、これはうまくいき、前に座っていた白髪の老人がほんとうにうれしそうに笑みくずれていた。

私たちはコンサートが終るとすぐにバスに乗り、深夜ベルリンへ向けてひた走った。この最初のコンサート二つを終えて感じたことは、ここにDDRでは、私たちの演奏に限ら

ず、人々は水や空気を欲するのと同じように生の演奏会を求めている、ということであった。東京では、音楽がアクセサリー化しているのではないだろうか。すでに十日未明、今夜はベルリンのシャウシュピールハウスでのコンサート、ベルリン音楽祭の一環、とのことである。

十月十日、ベルリン。シャウシュピールハウス。美しい、美しい。その豪華にして繊細、優雅にして愛らしいホールの様子はとても言葉には言い尽くせない。合唱団一同ホーツと溜め息をつき、しばし呆然自失。ここでもオルガンと合唱のプログラムであったが、オルガンに関しては、ホール付きのオルガニストが親切に楽器の様子を教えてくれ、アシスタントの井出君も、コンピュータ世代の坎の良さを發揮、またたく間に機械のからくりを理解し、なかなかのチームワークとなった。私たちは目を奪うシャンデリアや天井画の美しさを何とか自分たちの演奏にも採り入れたらと思ひ、細かいパッセージは常にも増して入念に、きらきらと輝く光さながらに歌おうと努力した。ここでも満員の聴衆、そして熱心な拍手。武久源造の演奏にはどよめくような、ひととき強く暖かい拍手がおくられ、日



ベルリン・シャウシュピールハウスでの練習

頃の彼自身の苦勞や、周りで彼を助ける人々の善意も確かに実ったといえる瞬間であった。もう一つ、ベルリンのコンサートで忘れられないのは、ホール付きのステージ・マネージヤである。私たちをステージに送り出してくれるとき、良い演奏を願う無言の微笑、目くばせ、そしてアンコールのタイミングの指示に至るまで、あのステージは彼が作ったものでは——と思わせる程、その仕事ぶりは見事であった。

終演後、ベルリン音楽祭実行委員会によるレセプション。来る日も来る日も、DDRの物資の豊かさ（来る前は物資の乏しさを伝える情報が多く、私たちは相当の覚悟と共に入国したのだった）に目を見張らされたのであったが、このレセプションの華やかさにも驚かされた。さまざまな種類の肉、野菜、果物、ワイン等々。そして音楽評論家やジャーナリストたちからの活発な質問。ベルリンが市を挙げ、市の名譽をかけて音楽活動を支援しているさまがひしひしと伝わってきた。

翌日エルフルトに向う。音楽史にはひんぱんに名の登場する古都エルフルト、残念ながら町を見物する時間は一分もなかった。古いオペラハウスに到着、練習。プログラムは柴田南雄《宇宙について》とシュッツ《マタイ受難曲》。マタイのイエス役にはDDRの若手バリトン歌手、アンドレアス・ゾンマーフェルト氏。ゾンマーフェルト氏のイエスは、驚く程速いドイツ語、歌うというよりはほとんど語りに徹した唱法。DDRと一口にいつても、演奏スタイルは世代によってはっきりと分かれ、若い世代は当然のことながらやはり現代的なさばさばした演奏で、情緒的な歌い回しというよりは知的な語り口、といった傾

向にあると思った。しかし、何よりも私たちの心を打ったのは、ゾンマーフェルト氏のひたむきな信仰であった。福音史家役の鈴木仁氏は、「彼と僕は本番の前に真剣にお祈りをしたのです。イエス役の人と祈った、という体験ははじめてのこと、思いがけないことでした」と話され、私たちの触れえたものの貴さを思った。

エルフルト終演後、そのままバスはドレスデンに向かった。ドレスデン着は午前一時。——ドレスデン。いうまでもなくシュッツの都。シュッツは、五十数年をここドレスデンに過ごした。シュッツ以来、いやそれ以前からここドレスデンはドイツ屈指の音楽の都であった。シュッツが宮廷楽長を務めた「シユターツカペレ・ドレスデン」は、代々ひときわ抜きん出た指揮者のもとで育まれ、「オーケストラの中のオーケストラ」といわれているとのことである。ここで、R・シユトラウスやカール・ベームらと共に長らくトロンプーン奏者として活躍されたA・バンブーラ教授は、私たちの到着を今か今かと待っていて下さり、十二日朝、さっそうとホテルに現われ、いきなり大きなトロンプーンのケースを差し出してこう言われた。「よく来た、よく来

た。さあ、これはこの間のバロック・トロンボーンのケースだ、持って帰っておくれ」

バンブーラ教授は、戦後間もなくこのシュターツカペレの中に、オリジナル楽器によるアンサンブル「カペラ・サギタリアーナ」(サギタリウスⅡシュッツ)を創設された。このオリジナル楽器による演奏というものが、一九三〇年代生まれのブリュッヘン、アーノンクール、クイケン兄弟らの手によってすばらしい成功を収めたことは周知の事実とはいえず、R・シュトラウスと共に演奏したその同じ人が、いち早くこの「カペラ・サギタリアーナ」を生み出していることに驚きの念を禁じえない。バンブーラ教授はすでに七十歳を過ぎ、ドレスデンでの仕事を終えられ、一九八二、八四年、東京芸術大学客員教授として日本人学生を教えられたのである。私は、DDR大使館のDr.クライネルトの御紹介でこのバンブーラ教授とお話する機会を得、教授がドレスデンへ帰られた際、貴重なバロック・トロンボーン二本(アルトとテノール)をシュッツ合唱団にいただいたのである。

——ハイリッヒ・シュッツ合唱団へ、シュッツ時代の響きが、再び生き生きと日本に鳴り響かんことを——とは、トロンボーンに添

えて教授が書いて下さったメッセージであるが、これを読んだとき、私の眼から不意に涙が溢れ、シュッツの音楽の、今なお生きてある霊妙を思わずにはいられなかった。

その日のコンサートは、ドレスデンでシュッツの四百回目の誕生日(十月十四日)を中心に繰り広げられたハイリッヒ・シュッツ祭の一環として、復元したばかりのゼンパー・オーパーで行なわれるはずであった。ゼンパー・オーパーは、第二次世界大戦の空襲で焼け落ち、それが一九八五年、四十年ぶりに元の姿に戻ったのである。この四十年にかけたDDRという国家の情熱、それを支持する国民の節約と勤勉には全く目を見張らせるものがある。ゼンパー・オーパーのしっとりとした美しさ、奥深いステージ、はてしなく上へ抜ける天井、それらに囲まれて、私は私自身の戦後四十年を思わずにはいられなかった。シュッツ祭には、DDRをはじめとし、ソ連、ポーランド、イギリス、ハンガリーそして日本などから演奏団体が集い、シュッツの作品とそれに関連する音楽で午前、午後、夜とひっきりなしにコンサートが開かれ、その間をぬって学会やシンポジウムが行なわれていた。私たちのプログラムは、柴田南雄(宇



エルフルト、ゾンマーフェルト氏と筆者

宙について)、アクステファーデのオルガン曲、シュッツのモテットというもので、シュッツ合唱団がこ二十七年間学び考えたことの総決算でもあった。

《宇宙について》は曲中に多くの即興部分を含み、その日の演奏会場の様子によってどのようにも作り変えることができる。演出にも即興性が満ち満ちているのだ。この演奏旅行のように、毎日違う演奏会場で初めて演奏するというような状況には、まことにぴったり

した曲である、というのも興味深い発見であった。ゼンパー・オーパーのステージは、前方に丸くせり出した照明のあたらない部分があり、曲中の《隠れキリシタンのオラシヨ》（祈り）を歌うには最適の場所であった。私たちは広い舞台を縦横に歩き回って「オラシヨ」を、また諸民族の礼拝歌を歌い、また歌った。良い気分だった。劇場のみの持つ魔力がそこには生きていたようであった。

さて、オルガン曲は、この演奏旅行の間じゅう常にブクステフーデの作品が選ばれた。彼が北ドイツ・オルガン楽派の中心人物であり、バツハ以前のオルガン音楽の頂点を築いた人でもあるにもかかわらず、J・S・バッハの陰にかくれた地味な存在となっていること、さらに、シユッツの音楽の中にある語り口とブクステフーデのそれとは非常に親近感があること、また、シユッツからJ・S・バツハへの百年をつなぐ最も重要な人であることなどがその理由であった。シユッツ十ブクステフーデの組み合わせは各地で話題となり、大きな反響をよんだ。

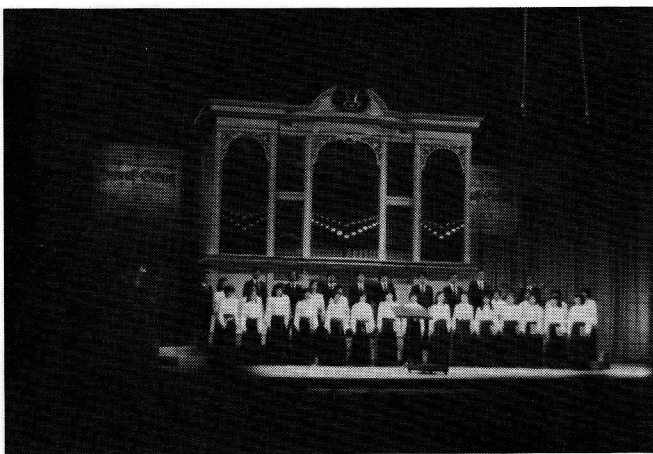
そしてシユッツのモテット。その一つ、《涙と共に種まく者は、喜びと共に刈り取らん》を歌うにあたって、私の胸には日本では考え

たことのなかった思いが押し寄せてきた（そう、「涙と共に種をまいた人」がここにいる。今私たちの演奏を聴いてくれているこの人達、この人々の一人びとりの四十年と、このシユッツの忍耐の長いフレーズを重ね合わせたい）。聴衆の拍手は今までのどれより演奏者との一体感に満ち、文字どおり夢のような時が流れた。またこの祝祭には、市当局をはじめとし、音楽学者や演奏家など各分野の人々が参加し、まことにドレスデンならではのシユッツ祭であった。

このあと三日間、私たちは歴史的名器、シルバーマン・オルガンのあるフライベルクのドーム、ヘンデルの町ハレのコンサートホール、ライプチヒのゲヴァントハウスで演奏会を重ねた。どの日も強烈な印象を残している。中でもこの旅行ではただ一度であった純粋な教会コンサート、フライベルク・ドームでのそれは、バロック時代から今に至る人間の心の葛藤がなまなましく押し寄せ、シルバーマンのこれまた人間の深層をえぐり出すような音とあいまって、ドームいっぱい溢れんばかりの聴衆ともども大きな渦に呑み込まれていくような、思い出すのに恐ろしいひとときであ

った。一言にしていえばパニック。国宝ともいえるような教会堂やオルガンに囲まれ、これまた、天才中の天才の作品を演奏しようとした我々は、大海原に迷いいで、帰り道を見失った蝶のようであった。

教会におけるコンサートは、会衆とともども神に捧げる行為であるから、終っても拍手はない。出口に立ち並んだ人々は、私たち一人びとりに強いまなざしを投げかけて送り出してくれたのであった。



ゼンパー・オーパーでの演奏

翌日、ハレでのコンサートにソプラノの桜井偕子さんをソリストに迎えた。彼女の愛らしく清澄な声質がシュッツと我が合唱団によ



記念に贈られたドレスデン市の飾り皿

くマッチするので、とてもうれしかった。

十五日、ゲヴァントハウス。世界中の指揮者、オーケストラ垂涎の的であるこの大ホールは、どこに座っていても、ステージの上で普通に話す声が届く。これも歴代の音楽家が心の底からの真実をもって積み重ねてきたものの結晶といえよう。コンサートが終りカペルマイスター（楽長）のマズーア教授が、私たち全員を日本食レストランに御招待下さった。こうして思い出すだけでも新しい発見をもたらすこの旅は、私たちの予想以上の重みを持つものであった。一団員の言葉をもってこの報告を終りたい。

——「我らの思考は彼の地で肉体を持った」

（一九八六年一月）



シュッツ祭レセプション